

藩鑑卷之二百三十目錄

大部十六

立花飛驒守源宗茂

北藩鑑卷之二百三十

立花

飛騨守源宗茂むねしげハ筑前國岩屋寶満の支城之高橋之脇しほ種入道紹運しゆんの嫡男ちやくなんトシテ童名わらわなト千熊丸ト云ヒ後に彌十郎やじうらうト云ヒ左邊トモ稱セリ實名じつなト云ヒ

志とくしうしてさしり宗虎まうし
統虎らるひハ鎮虎正成親成尚
政俊正信正經正かと名宗ましり
天正九年十月十日築に
筑前國之花山此城主之花伯耆
繼連入道道雪に養ふれと子
となりその女小配せり同十二年
九月之花の家督を嗣り同十

五年六月豊后家羽柴乃氏を
授け按ころ子慶長五年関原役
の後再び之花山復せり筑後國
柳川城を興へらるより同月
之花山を去り柳川にうつり
十二万二千二百石を領知を同
七月秩四位下に叙し侍從に任じ
このときより左邊將監と稱せり
慶長五年の秋と逆統にゆきむ

かもし豊后秀頼の味方せしに
より岡原丸軍果てのち柳川の
居城を加藤肥後と清正子避け
渡して大坂に屏居しその罪を
あつるふ同八年十月恩免を蒙
りて

東照宮に許賜し奥州棚倉
より一萬石此地を大まふ同

十五年七月陸奥國赤楯上総國
山邊郡やまのへのうちにありて二萬石を
加へらばあともせめて二萬石を願ふ
元和二年より隔日ふ

右徳院殿より伊傍に候しして
談話をもその凡二十人これと
其ころ内出元と雖も宗茂その
一人より列せり同六年十一月齋願

筑後國柳川に獲せしむりて十
万九千六百四十七石解を願ふも同
八年十二月勅命によりて飛騨守
小幡こはたけとら由相伴充たくら列を寛永
十五年正月

大猷院殿の作よりて肥前國
橋本はしもとと赴き切支丹の徒を征討
す同年十月勅命により荆姫

として之齋と稱し隠栖の身と
なり同十九年十一月廿六日七十
四歳よりして卒す

一 高橋主膳兵衛禎種入道紹運乃

嫡男左近將監統虎トウ

統虎ハ宗茂ノ初名
紹運ハ宗茂ノ実父

永祿十二年己巳八月十二日子筑前
國山石屋川城より誕生はり母は
齋藤兵部大輔禎實の女なり

後子采雲
院と辨す

その生稟強健うして乳哺
小滞るるところかうりけまこい竟は病
に冒されたまふこももたなく肥瘠
五調うして四六歳のころにいふては
尋常の七八歳児輩よりもさうく
しく能くそのまふすはまの
こころたうこと多くうしてましく人古を
ふまふこと度くあり既に六七歳に

いふりたまひて相撲を好み十歳
ころり此児を取て倒したまふ事
いと事もたうく易うりけり長し
給ふにまういひて穂敏頼悟うして
辨舌に才あることころく元人に
抽んでたまひけまこはつるれ大将の
器量と具したまひそのかか
人感うたてまうきとりふる

か
立齋齋聞記

一 之北藤伯軒道雪川嫡子左近将監
宗茂 初ハ統虎
と号ス 実ハ高橋主膳玄信
法種入道紹運此長男なり童名
も千熊凡とて中へける初なり
より状貌甚く瑰偉なりて四六
拳のとき言語の明く分てること
つらむ壯更に異なりとも六七歳

うて角觥を好む十歳をうけ
児輩をいたやましく取て倒しける

九州諸將軍記
戸次軍談

一 天正四年八月のとき見物する事
らうてその場に出てそのとをさす
最中に群集の人中に浮論出
まて又傷殺害をさすりく狼藉なり
その場にありける貴賤男女大に



騒動周章して方に逃ぐる
統虎公を介抱しふる案もこの
幼年と具ししをまうてそを
之をんとし統虎公がも怨怒入
氣色をくしてのこまふに今日
見物にむけて事終るやと問答に
介抱のその答に只今騒ぎま
騒ぎのこり出ましかやうのとさう

幼年おとにおいしまたそのに小と
中より統虎うちわくし流し汝等
周章しるここのおしよこの方に
彼う相をむねいゆに仇と
をまへまきり候今いふる怖しき
事の出まるといふて見物を
こまきり退くしきとてさうよ動
情の氣色もまきりまきりて兎角

もろろ騒動も静まりけしは諸
人も之帰て見おまかくて統虎
公の事終りて帰せしむひらり
今以てまゝ初種よりときより物に
動静一たまひたることと人みな
これと感しそまろくもといふ
か

立母齋圃記
九州諸將軍記

一 朽網新助咄に筑前多良川の

大梁内見物に屋敷内出の時豊前
筑前の國侍より内馳をこれあ
う之能任者よりこれあり小原因
家来と因北相模と云後月条論
りて内質死人隊多これあり小
けとき宗茂松より内知事ふく
神始より内所拜諸人感しき
くろすちゆる野上紹談に相尋小

へい内咄中し小喧花につき見物
諸人混乱仕り諸大名の旗友も
乱立中し道雪松内侍中も内座
をかされし所存せしと云ふ由布
源又と信^{雪嘉}一人内前の内座をか
し所を存しりやうし中して何れも引
連系しりて群巻により戸次道雪
何方に内座しれ由布源又と信

これぞ我を小と云ふより小と云ふ道雪
松は長遠家系を一人に連てれし
て屋敷の内様友へ内入るる強勃
内静め内座をかされしは存し内座をか
源又と信内免とけ方へ系しりへ
内意をかされしはつぎ何れも屋敷の
内様友近く系し警書仕りけし
紹雲松より内出かされしは十席松

とうり 之舟松 内童名 内出るされ小諸家の棧敷
 礼立中より深十席松内棧敷とあり
 ありし強き中より道雪松
 内覧松いされ深十席松内松巻量の
 ほと感し思はされ一向に由養子
 の内望し松いされ小田小相模田北
 紹哲并より至敷より由進智あり

公程閑暇雑書

一 之花宗茂弱年より千熊と称し
 高橋紹運方より之花道雪松
 こと(性)松いけるとき科人を
 道雪松より中付討せたり不意の
 変るれば千熊いりおのいけるやと
 胸へ道雪の子を入て見るよいきりも
 揺動せよこれ依り道雪の子熊り
 大丈夫なるべき事や考へ養子

とよむ
續武家兩談
太平雜話

一 統虎松内養子のとき内年十六と
諸人驚くやも然れども之母松
内出子九つの内筆道雪松内一所
より内胎らよ〜れりとき結と内
む〜りかされりも内後かされ武士
の内は内存なく女のやうなる
内而胎物の用に内えかされま〜き

とて殊の外内叱り〜内色かされりよの
事なりま〜十この内筆道雪松内同
道よ〜粟のか〜多く是はゆるりよ
内通りかされり〜内是ふ粟のい〜と
か〜とた〜と〜しりこれのけり〜と作
れりとき由布源を博を〜りあり
よ〜と押を〜みりあ〜一入内痛〜かされ
り〜作〜き後内あ〜た〜れ〜も内難

かたしれくると内出たり 公程閑暇雜書

一 天正六年十一年のとき父紹運公重
科の者や萩尾といふそのまかせ
付しりたまひしり統虎公を事と
学治む萩尾と學てのいまふの神
妙まはしりといふて何とて
つるその次第を向たまふは萩尾
谷て中やう志うくの所そ彼者よ

りあひ後ろよりたう一吉刀ははり
と中け色ハ統虎公神妙なりと
賞を授けし流る儀なることの中やう
かやう此は物ハううよりハは易き
そのまてルと中け色ハ統虎公是
を公にして前後のわけを細くも
勝るこそを柄るれ敵を討よ討
やまはたてて討つていふこと

仕損まゝの時のよふ——まよひつゝま
かゝる詮をかき書きしつゝそのい吾成人
のしら軍せんとき妨よなるへ——と
かよふ——やう教訓——たまは
かの若赤面——て無きくく
立母為
聞記
一統虎十二歳のときいなきとよきく
たましい同一年ころい童をいもい
に連ていけいけいけい——付狂狗

吼かりけいけい供ふつりけい童とよ
怒れ駭きき逃るる統虎公あ——
も騒きたまひつゝも通て流しよ
かの狂狗大よ怒りて走りかゝるを
飛ちうい刀を抜てむねうらに
走——う——あたまの狗に怒れ
逃去あかくて刀を鞘に収て通て
たまひ伝運公いれとあたまて統虎

公ののこまふに汝刀を授て防くを
るは何を斬るやとのいまふハ
統虎公うちあひて太刀刀をハ
敵をこし斬りけし狗猫かこを
斬るといふぬくぬくのいまふハ
紹運公涙を浮へ最も器量を見え
より才智通しうして普通より
成人の後その才ははるるかた

と教へ流しり

新武者物語

一天正六年十二月より翌年三月夏
まで蒲池徳行筑紫廣門就造寺
隆信秋月種實相ともに共力して
宗茂より兵械寶満を攻るといふも
宗茂防まされ一層も敗れせよ
敵をこしうして翌年七月中向
敗北をこの時宗茂十二卷軍陣の

とらりなり 寛永譜

一天正八年秋月種實二月より九月
いづるまき數十度寶満の城を攻る
といへる宗茂遂に城を破るる
ことなき敵利を失て引退く
同九年秋月種實原田信種と
かきし合せて宗茂を居城をせむ
九月筑前州石坂よりあひ戦ふ

こと六七度敵兵利つとも引退
く 同上

一天正九年十一月のとき紹運公
出陣したまふりつらうといふや
統虎も出陣せよくと戦れり
まいけまの統虎公かこまりて答
たまふい作なくとも内供仕度ゆへ
ともいふいともまき健りあつた

て敵も逃るゝかひあるまじき事と作る
へ一今一五年もさるる一方を敵
りて我に向ひらんともそのいまひ
ける是をまきく人の思慮深く尋
常るゝれ智あるもまきくまき
と感するものもたうまきらうまき
そのい初めより公後れたまくる口惜
きよと嘲るものも多うけりを頃の

風俗之智うてうを氣ふるも是
を以てさう知るく一統荒公かゝる
器量たることをも之花の戸次道吉
せつてくて是非にたいて養子と給は
らんともむ給へとも紹運公やうに
許容かうりたり
之亦嘉高廟祀
之花家之祀
一天正九年紹運秋月の頃地嘉摩
穂波へ出張し所々を放火し引

帰らんときるところに種実五千
斤跡を慕ふて追かぐる道雪
紹運石坂よりつて返も紹運ら
坂中にとどまりらる統と前
て敵を待ててひくく道雪は小
松の陰より隠れて静まりかたり
備へけるはとき家茂十六歳初陣
のことあり唐綾威一の獲ひ

額頰の總袈形うちしる曹の緒と
しり金仙の太刀と佩十六指
くる截生の箭筈もよ負ひか
塗籠の弓州志中を抱り馬の馬
に金貝丸鞍をきてありとのり
麻をひきき士卒を拓き下知
しけし敵をよ追つきら我に
走らるるものも此方へあはれ

紹運州陣より之所より隔て
備や之んとも後見に附る有馬
伴賀こしむと分詮ふま殿のとも
ひるか敵の大勢るれいと隔て
らましてかかるふま紹運公と由一所
小陣をとりたまくと深く制しりれ
宗茂うらわしいて敵大勢るれいと
にほとり奉りあるへま紹運と一所

彼をあるまな〜我をま〜この
とりの紹運の機と一同に急行〜
てよも我下知ふと〜理を
曲て我を〜ひは任せよと〜其
有馬は言公肝の感激〜実の度
の軍よ〜そのいよもかゝる思意
ら〜ま〜て長年
ゆ〜その戦場〜

き下知をわすたまるみ天性武將
の由畧量たりぬるハ内下知は任事
つとむ百六十勝をうると川分て
一隊の陣を取にけるなるほく秋
月此先陣さすもさ疎しき石坂
と息をまつとも攻奪る紹運は兵
敵を矢頭は逃つけ見おろして
ら後砲をつらへ之敵はあらず

ひるむとこゝろを紹運麾を振擧げ
みろくさ先よとくわい小治部を
とつたその後出に一審は捨て公を
とやり権の着者さすこむとくり
おろき突てかくりける秋月の先陣
七百餘人さすもかく坂より下に
まくり居るれい二陣の勢一子居人
を發して攻する紹運長刀を

うち振てふ公せ相親入宗茂も
見て時分いよまると横合々切て
かゝる敵の後陣もさきも續て攻
登り前後より採合せ火出るほど
戦ひける敵も大将も見くらげん
自取のそのまに目もふも宗茂の
前へ一文字よ切て入る有馬伊賀
宗茂の馬先よかけ塞ぐる逃つ

敵もこ務まて切伏せけるうのまりに
強く戦ひて類にふを肩ひ眼に
血入て防まらぬて見とてとあを
秋月う家の子姫に伎前といへる
別勇姓その大長刀をさうまう
あるそのと雑伏に宗茂を同し
ておてかゝる宗茂矢を取てうち
番ひより引てひやうと放つらや

まゝに城に長刀の柄を射削て
つらまゝ矢らふの腕をきくくく
くくく城に仕と事ともせよ
長刀をかきくく投擲宗茂を
かきくく並へて組りける宗茂
ちんちんちんちんせよ城に取て
引くまけきく秋尾大守か
せ帰ち首と搔落す

戸次軍談
九州諸將軍記

一 天正十年筑前國早良郡小戸村
郡中の郷人も要害をかまゝと
然る道雪に仕と攻へくと猶子
銃虎を伏軍と二月十日彼要害
とく奇くその器を見るに城を
撃つ逆茂を結し柵とくを
えりて屏をかきく銃炮を
徹しく放ちける之花勢に

執事もせき堀逆成女を切破りて
巨魁の奴々の首を刈村外に自
首し既し帰るんとせしと云ふ
原田秋月宗像大軍を張てまら
うけ午の刻のなまらけより申の
刻のまき入札して幾人といふ
原田親考の家臣統野大炊助横
合とて不繁く、鉄炮をおくは

之花母騒ぎにて、心を亂す、この故
と知ると統虎これを見て、六百
騎、吉川峠により、岡をとつと揚
自り、志先はさみだり、ふ
色もあぐ敵軍の後ろ、切て入れ
その勢ひは、辟易して、左右、圍
靡く、大将とて、とんと下知、これ
統虎、容髪、の透向、たぐ、散

切之化ハ前後より騒ぎ崩れしや
敗軍よりありにける統虎臨機
の謀祓に名將子作業より上下獲
感とありよける 戸次軍談

一 天正十二年統虎公十六歳より初
陣よりありて大友宗麟より去り
来日向川合戦より討負治りて後
筑前より秋月宗像の一黨肥前に

就造寺筑紫の人々蜂起して
筑後筑前此向にありて大友一
味の城より攻取んとありて
合戦ありし時ありて宗麟いさむ
淋く喜へりけり此を獲りて
さるより力足るるを去りて筑後國の
任人同往新治郡大友ハ秋月に
心合せ旗を掲ぐるより宗麟は

だまされて筑後のものゝ敵とある
らる元の大車ししむるここと
なり急き同往所を討平けりよ
とて朽網入道宗歴に二千旅騎を
相派てさう向くるかくて同往所を
楯籠る井上城にさうあて攻め
この城をさう落へるこ秋月
種實二千旅騎をて後誥しりれ

朽網前後の敵に術計をうらふこ
圍を解て引退き筑後川と隔て
對陣さう橋紹運戸次道雪を
とめて支旗を以て朽網に力を
合せ秋月と討んと出陣したまふ
かゝる所を豊後府内子謀叛の
出来けきは宗麟等も朽網を
豊後へ引返さる紹運道雪を

聞て申すに云はく中途より帰らん
とたまひしけり造りし御陣もも
強多し秋月所願加摩穂波の
郡に討出乱妨せんとも不くと放
火しと通れとも秋月出たれ
は合戦もかきとてよ引くんと
語ふともあし秋月五千餘騎を率
して跡を踏んととも紹雲道雪に

二千餘騎を引まとい石坂を攻て
返りけりとき統虎初陣多し有馬
任賀とらふおされり別のことのを
統虎公の女精とて百六十騎を
相副らる之母爲聞記

一 天正十二年十一月秋月種實との
合戦敵味方入乱れて勝負もいさ
見えざるともあし道雪一千餘騎

時^にそよふれと小松の陰より一度に
起り太鼓を打ち立てわりに突て
かゝる秋月勢との勇戦に辟易し
ふつと崩れし引退く道雪紹運
透向より近し攻詰り討捕首級
七百六十凱歌を奉り帰陣せり
この軍去り天正十年十月六日の
事たりけりよき道雪宗茂の事

らき尋常あつるらりさまと見
えけ旅人の後に名取の事
と推察し養子とせりふさま
是まわらうも紹運さま小許容
かろりけるを道雪かきねて中され
けるに我壯年此より今七十
有届くころまき朝言若殿卒劣
して多くの敵を討靡り望み

破り税と挫くといへとも大友の衰
運もや賊徒に負ても朽葉り味方の
勝も日よ暮ふ近づくは偽津就
造寺遠くは毛利も等なり大敵
その外の小敵は算するよいまわ
我年老ふるふるは死期を迫り
ふらり我死してのち誰の身造と
心を合せ大友家を助くべき由造

いまは壮年よして男子一人の是非
宗族を以て我も賜えり之花の家と
相續させ我死後よいづりても由造
と心と一より國家を治めり
全く我家の爲とありはまらざる
はまらざる運も當世の理に服して
黙止しかりともは親也の嫡男
ふはしきりきりといふ道雪

大に悦び原尻宮内をさぐり弑せらる
紹運よりい廿戸口十を討ち田久作
二人のそのを相副して之を死へを送る
れけり道雪の家をむうへ取在悦
の禮をくりるをも帰ち之を花家の
重器獲かく附属しよ下さくわ
き悦へりそれより道雪死去の後
九州こもくく軟國とあり命の

危き事旦夕よせまれとも忠義を守
りて心を愛せると教奉筑城辛苦
せしう秀吉公の西征と侍うけ多氣
の衰運を聞き先祖の義名をたつひも
こと九州にたつ宗茂一人なり秀吉
公よりも度々に感状下されけり
九州諸
將軍記
一 秋月勢旅多討より一とき道雪ら
紹運よ向ひしてのこまふやうゆ遠い男

子二人を待つるまへり統虎公とハね
この祈を任せしこの入道は揚る
へしと狸不盡よ元たまふ紹運思
案し流るハ今九州のちりさまを
見ると大友の滅亡迫きにあり薩摩
小徳津肥前よ就造寺中國子毛利
尾等の大敵四方にちりその外藩
裡に小敵かそふるる暇なくこむを

徳せんよまると謀りて進軍よむ
て宗麟邪法に迷倒して政道皆
邪治らんハ終りハ亡びたまふへし
吾道雪と心を一つして九州を治ん
小恐るへしそのちりも統虎公為と
いしその家の為とありけしハさも
就是凡嫡男と道雪よ約諾して
之花へ送りたまふ道雪最老の女

子おしせしと統虎此妻とて
重代の徳と授け悦び治ふ事
限たの

立舟齋圃記

一 之齋身代ハ之花とて萬四万石
去りかゝり大くは十万石程これ
あるより

近代雜記

一 天正十三年七月秀吉公為關白天下咸
屬所轄而西藩多不服各據郡縣擅權爭

雄戰無寧日是時公治筑前立花城恩以
撫民義以厲士士皆樂為之用每戰立功

立花戰功錄

一 天正十二年道雪紹運累丈表へ
出張し之花子の左邊將監家茂
小薦野之河増時十時振津与
と後見して城を守らせざる不
小秋月種實との隙をうかひ

八千石の城を催しをりあせして
さかきしを放火し明日の城を
一搦り攻落さんとし里を隔て
宿陣を城中の老若ともは警怖
しけり宗辰警く氣色もたらく
薦野之河も米多比入席次第を
迫つけ秋月の大勢明日城を攻る
とき道雪は尚もたより来はる

るれい城より出て類ふこといつるま
とかるも油取をまへし汝等今
夜池向ひあ討して逃散せよと
あうけまは薦野分て小勢を以て
大敵と戦はんや危き御子小島城
々堅固の要害より地の利を備は
しは復祈くも堅り待合戦に
いんまへし卒示す勢をよむこと

如何に歩くと走ると願望せざりけむに
宗我孫子與氣よしてこれ我の勢の多
少よりよきも不意に起り敵の虚を
討ときい勝もといふ事あるへきを
勝も負るも流るより時の運るに
城を守り防くとも運つまなない利
あるまは術を非に吾とありた
といへば汝等城をまめりへし某

性向て逃そりんと既に討出んと
志いさくは薦野も今い得心し如
も我の逆向いしやも一と二百の
勢を二と五分け馬の音を響
と咬せし卒皆枚をうくみ軍摺
を捲鳴をきつりてと考り案の
こころ敵に何れ用心もなす番を
ともうらふ兵眠て篝火も林火走け

くろし 薦野に二百餘人篝火をくわ
うら消し相圖の拍子はうらまは
三方より一層に切て入にける陣中
大に騒動し前後に迷ふを所を
奇に四方に驅散て所々の陣をに
火を指て縦横に盡すまうと程実
なる由に將ろれいむしと噪うを狀
几子腹をみけみ幣をせしむらけ

種實くろしといくく一所にらつまり
幾へと諸卒よ下知をるしけしに
究竟の士にふ百人をく集り切先を
そらへ付てかゝるぬ帛次席う二百餘
人背の方よりをく奇なる杖の後に
隠れ居るに隊人の兵も一層に起り
奇を發して攻幾ふさしもの秋月勢
忽ち切まはれ方々へ逃散る暫時

の戦^いりけきとも討取首之百餘級^のの
傍に^にけさせ勝^つ岡を^とりつけ^け静^ま
之花へ^に引^ける^は統^一虎^十七^年の
秋の^事なり^との^後種^實も^城
を^攻ん^とも^りな^り大^勢只^之花
の^領地^を入^り耕^作を^さま^しけ
放^火も^り後^に宗^茂の^も
せ^と敷^箇度^に其^老公^の合^戦に

うら勝て一^度も^不覺^とと^りさ^り

けり 九州藩將軍記
立^母為^高庵^記





